

保育実践を基にした子育て支援力の育成

— 子育て支援広場での学生と保護者の関わりから —

長谷川美香 狩野奈緒子

Nurturing Childcare Support through Childcare Practice

— Analyzing the Relationship between College Students and Parents
in a Childcare Open Space —

Mika Hasegawa Naoko Kanou

Abstract

In this paper, the researchers analyzed the results of a survey given to students and parents about how parental support is developed through the relationship with guardians at a childcare open space (support square) operated by a junior college. Through the results of first- and second-year students, and their differences in image, thought, and engagement, it became clear that the ability to support child development has gradually been fostered through the relationship with parents. The understanding of childcare support depends on the understanding of the guardians and the utilization of regional resources. From now, based on the new curriculum, the question is how to promote cooperation between these subjects such as childcare support development based on the practice held at a childcare open space.

Key words : Childcare support, Childcare practical skills, Relationship between students and guardians, Childcare open space (plaza)

はじめに

筆者らはこれまで、本学で開催されている子育て支援広場、「親と子の広場」、「さくらっこ広場」¹(以下、2つを総称して「広場」と記す)を通した学生の学びについて研究してきた²。「広場」では、学生が保護者や子どもと一緒に遊び、会話を楽しむ姿が見られる他、これまで「親子クッキング」、「野外保育」、図書館での「おはなし会」なども行い、関わりを深めてきた。実習外においても実践的に学ぶ場があることは、学生が自身の保育観を見つめ直し、新たな課題を見出したり、保育観を広げる機会になったりと、保育実践力を高めることに繋がっている。

さらに、「親と子の広場」が運営されてから2018年度で12年目、「さくらっこ広場」は2年目を迎え、乳幼児期から10年以上通う子どもや、毎年新たな親子の参加がある他、卒業生が母親となって子どもと参加するケースもある。「地域子育て支援広場の機能の中での親子の交流の促進や、子育て等に関する相談・援助の実施機能、そして継続して参加する親子の保護者においては、主体的な親同士の助け合いや助言など、ピアヘルプ能力を発揮しながら自らの子育てコミュニティの形成に尽くす姿も見られ³、子どもだけでなく保護者自身が成長する場にもなっている。「広場」

が、地域に根差し貢献するという、短期大学の使命の一端を担っているとも言えよう。

近年、子育て支援の必要性が声高に叫ばれており、保育者には地域の子育て支援を担う役割もある。保護者と連携して子どもを育てていく視点を持ちながら、子どもと保護者の関係性や保護者同士の関係性などを把握し、それぞれの状況に合わせ、子育てに関する相談に応じる、地域の子育て情報を伝える、保護者同士の交流を促す、必要に応じて専門機関と連携するといった専門性が求められる。

保育者になったと同時にこれらの重要な役割を担うのは、特に経験の浅い保育者にとっては容易なことではなく、本学生活科学科福祉こども専攻こども保育コース（以下、「こども保育コース」と記す）の卒業生からも、保護者との関わり方に難しさを感じるとの声も聞かれる。

2019年度、幼稚園教諭養成課程、保育士養成課程においては、カリキュラムの見直しが行われ、その背景には、子育て家庭の状況や子育て家庭を取り巻く社会情勢の変化、2017年の「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の改訂などがあり、保育者には資質や専門性の向上がさらに求められる。

保育者養成校では既に、子育て支援に関する専門性を育成するため、子育て支援事業に取り組む、学内で子育て支援広場を運営する、学生が学外の子育て支援施設で実習を行うといった取り組みをするケースもあるが、保育者養成校によって、どの程度重要視され、実施されているのかは様々である。しかし、昨今の状況を鑑みるに、保育者養成の段階から、学生に、子育て家庭の実態を知り、子育て支援力を高める環境を作ることが益々求められるであろう。

本稿では特に、「広場」での保護者と学生の関わりに焦点を当て、どのように子育て支援力が育成されているのかを探り、分析することを試みる。

I. 研究の目的

本稿では、学生の子育て支援力育成の現状を明らかにし、さらなる学びの充実を図るため、こども保育コースの学生や、「広場」に参加する保護者を対象とした調査を行った。

「広場」で保護者と関わりを持つことを通し、学生に、①子育て支援力がどのように育成されているのか、②1年生、2年生ではどういった学びの変化があるのか、そして保護者は、③「広場」に学生が参加することをどう捉えているのか、④学生の参加が保護者にとってどういう意義をもたらしているのかを中心に、現状を明らかにする。

さらに、現状を踏まえながら、2019年度改訂保育者養成新カリキュラムを見据え、今後の課題を示す。

II. 研究の方法

「広場」に参加している、本学こども保育コースの1年生、2年生と保護者に対し、半構造化面接法による個別インタビューを行い、質的に分析、検討することとした。調査対象者に対しては、事前に研究の趣旨や目的、プライバシーの保護について説明し、許可を得た。

こども保育コースの学生は、普段から、授業としてまたは自主的に「広場」に参加する。参加する頻度は学生により違うが、入学前から「広場」への参加に期待感を抱いていたという学生や、実習の他にも親子と触れ合える機会を得たい学生が積極的に参加している他、1年生の前期より、こども保育コースの複数の科目で、参加を前提とした授業内容を含んでいるため、基本的に1年生の前期中に全員が「広場」に参加することとなる。本稿では1年生2名、2年生2名にインタビューを行った。

平日開催の「親と子の広場」参加者は、0歳から2歳の未就園児とその保護者、土曜開催の「さくらっこ広場」参加者は0歳から小学生とその保護者が多い。どちらにも参加していたり、子どもが未就園だった頃は「親と子の広場」に参加し、保育所や幼稚園に入ると平日に参加することは難しいため、「さくらっこ広場」に参加したりするケースもある。本稿では、両方に参加する保護者（どちらも母親）2名にインタビューをした。

Ⅲ. 研究の結果

学生、保護者、それぞれのインタビューの結果は以下の通りである。なお、それぞれの結果は、主なインタビューの内容とそれに対する語りをまとめたものである。

1. 学生へのインタビューから

① こども保育コース1年生 学生A

学生Aは広場に複数回参加し、土曜日の「さくらっこ広場」に参加した際に、参加者の保護者（父親）と話をする機会を得た。

インタビュー担当者	第2筆者
インタビューを行った時期・場所	2018年8月 第2筆者研究室
インタビュー総時間	16分
インタビューの主な内容	(1) 「広場」に参加して、子どもと保護者に関わることで、新たに気付いたこと (2) 「広場」の親を見ての感想、関わってみての感想 (3) 子育て支援について「広場」で学んでいると感じること (4) 保育士の役割としての、子育て支援とは

(1) 「広場」に参加して、子どもと保護者に関わることで、新たに気付いたこと

のびのびした広場の環境の中で、例えば「ビーズをあんなふうにくちまける遊び」なども一例だが、親自身が家庭では子どもにさせられないようなことが、「広場」では出来る。それが、親にとっても「息抜きっていうか、そんなふう」に感じているのではないかと思っている。

親の中には、関連する授業の事例にも出てきたが、「不器用なお母さん」も存在するということが、「広場」で見えて、分かる時もあった。

親によっては、子どもと積極的に遊んだり関わったり「私たちにも話しかけてくるお母さんも」いれば、「控えめっていう感じのお母さん」や、黙って傍らで見ている親もいる。一人ひとりの親にも子育ての「個性」があると気付いたそうである。

(2) 「広場」の親を見ての感想、関わってみての感想

双子を連れて参加していた父親には、自分の方から話しかけたのではなく、「双子の子育てが大変そうだなと思って見ていたら、『大変なんですよ』って、ボソッと（父親が）言った」場面があった。

「二人とも、行きたいほうにパーッと行っちゃう様子で、それに対してお父さん一人ではいっぺんに出来ないことが多いのに、一人ひとりに対応するっていうか」父親なりに双子に関わる姿を見て、「いいなって」思ったそうだ。

他の親を見ていると、「けんかをふっかけたり、おもちゃを奪いに行っただけの子どもの親だったら、相手の子どもの親にどう思われるのか、すごい気になる」と思うのだが、「広場」の雰囲気がお互い、『いいよ』って、言える感じなのかなと」思っている。

(3) 子育て支援について「広場」で学んでいると感じること

「広場」の保育を見ながら、「子どもは無邪気だから、一番は幼稚園とかでも、自由に遊べる、過ごせる環境がいいと思います。幼稚園とかだと、集団行動になっちゃって」と、「広場」の様子とは矛盾を感じたことを挙げた。

なお、第2筆者の関連授業で紹介した先進的な保育の事例を読んで、「自分が幼稚園の頃は、よく覚えていないけ

れど、毎日決まったことをしていた気がする」と、自分自身の保育観の転換について語った。

(4) 保育士の役割としての、子育て支援とは

学生自身の母親が保育士として、子育て支援センターで働いていることを挙げながら、「自分の子育て経験について、話すことがある」、「子育て支援は、子どもの家庭の生活のサイクルや、両親の職業などにも踏み込んでいく難しい面がある」と感じていると語った。

なお、将来は「保護者の力になれる」保育士を目指したいという希望も語られた。

② こども保育コース1年生 学生B

学生Bは「広場」に、複数回参加している。保護者の姿を見たり、交流したりする中で、保護者に対するイメージや思いに変化があったそうで、そこに焦点をあて、話を進めた。

インタビュー担当者	第1筆者
インタビューを行った時期・場所	2018年8月 保育実習指導室（本学）
インタビュー総時間	23分
インタビューの主な内容	(1) 「広場」に参加する前、参加当初の保護者に対するイメージ (2) 複数回参加した後の、保護者に対する思いや、交流した感想 (3) 保育者を目指す学生として、また保育者になってからの子育て支援への役割

(1) 「広場」に参加する前、参加当初の保護者に対するイメージ

「広場」に参加する前や、参加した当初は、「怖かったです。（自分が）子どもと接しているのを保護者は見ているとは聞いていたんですけど、どういう思いで見ているんだろうって、不安でした」と、怖いイメージを抱いていたことを語った。学生が子どもと遊んでいる姿を厳しい目で見ているのではないかと思い、緊張感のある中で参加していたそうである。

他の1年生達も参加した当初は緊張し、不安を感じながら参加していたそうで、その理由としては、互いに言葉にはしないものの、保護者の目が気になるという緊張感が強かったからではないかと感じている。

また、「子どもとだけしか接しないものと思っていた」と、「広場」での学生の役割は、あくまで「子どもと接すること、遊ぶこと」であり、保護者と関わるのはスタッフとして参加している教員のみだと思っていた。

(2) 複数回参加した後の、保護者に対する思いや、交流した感想

保護者から「ありがとう、一緒に遊んでくれて」と言われることが度々あり、学生が子どもと一緒に遊ぶことが、保護者にとっても何かしら役立っていると思うようになった。「ありがとう」と言われることが、「参加して良かった」という安心感、満足感にも繋がっている。

保護者の子どもへの接し方を見たり、保護者と会話したりする中で、「色々な子育ての仕方があって、何が正しいのかはわからないけれど、どういう子育てが子どもにとっていいのか」と考えることもある。

さらに、「広場」での経験が保育者となってから役立つと実感すると共に、「すぐ帰るよって言わないで帰りたくないまで待つ、子どもの意見を尊重するお母さんの姿から、自分もお母さんになったら常に冷静に判断出来る人になりたい」とも語った。

(3) 保育者を目指す学生として、また保育者になってからの子育て支援への役割

学生の「広場」への参加が、保護者にとって役立っていると実感しているが、「子育て支援って聞くと、子育てをする保護者を助けることだと思うので、やっぱり私達が、保護者に対してアドバイスしてってということなのかな」と語っていた。そのため、「今は、私達は経験が浅いし、知識も全然知らないので、私達がアドバイスを言っても、保護者も信用出来ないというか、そんなに信頼を持ってもらえないと思うので、やっぱりそこは自分達が頑張るしかないんじゃないかな」と思っている。

保育基礎演習のグループでの話し合いにおいても、「悩みとかがあったら、私達から声掛けすることも大事だと思うし、私達が勉強して身に付けた知識とか、実習とかで学んだことをアドバイスして、保護者の方に教えたりするのも、大事だと思うし。そういう所で少しずつ信頼関係を築くことが大事なんじゃないかっていう話をした」と語った。

「悩みとかを言われたら、多分戸惑うと思うけど、自分達が知っている範囲では、伝えていけたら」と、保育を学ぶ者として、未熟ながらも保護者を支えたいという強い思いも述べていた。

③ こども保育コース2年生 学生C

学生Cは、1年生の頃は、前期から時々「広場」に参加していた。2年生になってからは、特別研究(卒業研究)のテーマのために、「広場」に継続して参加している。

インタビューでは、子育て支援の本質的な意味についての捉え方から質問を始めたところ、5月から6月にかけて行った、幼稚園実習Ⅱ(3週間15日)、6月に行った保育実習Ⅰ(施設)(2週間10日)について言及した。

インタビュー担当者	第2筆者
インタビューを行った時期・場所	2018年8月 第2筆者研究室
インタビュー総時間	23分
インタビューの主な内容	(1) 子育て支援についての自分の現在の捉え方 (2) 幼稚園実習での子育て支援の事例 (3) 幼稚園教諭の保護者支援の手法 (4) 施設職員の保護者支援の手法 (5) 子育て支援についての現在の自分の学びの課題

(1) 子育て支援についての自分の現在の捉え方

「保護者の悩みを聞いていくときに『一緒に頑張っていきましょう』的なことを伝えること。解決ができないとしても」と、「子どものことを一緒になって考えること」として、幼稚園実習での事例を挙げた。

(2) 幼稚園実習での子育て支援の事例

「幼稚園実習で、ちょうど環境の変化などで(年中組5月)不安定になった子どもが」いた。「ちょうど、グレーゾーンの子どもとして、気付かれ始めた子ども」で、「先生方も(障害については)分からないから、お母さんにも『こうですよ』なんて言えないので、まずは、『家庭で何か困っていること』はないかと」聞き始めていた。

そうしたところ、「(子どもが)『幼稚園に行きたくない』と言うこと」などを、母親が話し始めた場面に、偶然立ち会った。その時、「先生は(登園渋りの)原因を探るというよりは、『では、園ではこうやってみましょう』という姿勢だった。このように、一緒に考える姿勢が、子育て支援になって」いるのではないかと思うと語った。

(3) 幼稚園教諭の保護者支援の手法

「例えば、障害の心当たりがあるなどということは言わずに、最初は解決策というか、園では具体的にこうしてみましようというような工夫とか、親に話している場面」を横から見ていた。この子どもについては、実習Ⅰ（前年度10月）の時点では、登園を渋る様子も無かったのに、実習Ⅱの当初から、登園時に泣く様子があり、気になっていたそうである。

そのような中で「お母さんと先生が、結構話し込んでいて」聞くことが出来た。担任に事情を聴いてみると「子どもに、自閉的な傾向があり、環境の変化に弱いことから、このような様子が表れているのではないかと、園でも気付き始め、保護者との話し合いも始まったところであるという説明を受けた。

小規模の園だったため、休憩の時には職員室で、職員同士の話し合いの場面や、副園長が参考図書を勧める場面なども見た。「保育者同士の話し合いから出てきたものを、保護者に伝えていることも、何となく」見ていて分かったそうである。

自分が実習に入ったことも、「環境の変化」の一因であると、途中で気付いた。実習は3週間だが、「3週目の最初の辺りで、子どもが私に慣れてきて、今後実習が終わったら、また『不安定さが出るかもしれない』と、先生が話していた。」

同じクラスに、ダウン症の子どもがいて、「特別支援担当の先生がついて」いたので、普段はこの支援担当が、この子どもについても、支援する場面が多かった。

このような支援体制への気付きにも言及したが、それは実習時点では整理されず、実習後のインタビューの中で自身で語りながら、気付いて整理されたことも多いという。

(4) 施設職員（障害者自立支援施設）の保護者支援の手法

施設は、「基本的に保護者とは実習生は会わないし、関係ない感じ」だが、週末に外泊して家庭に帰った利用者さんなど、「帰る前と帰った後の行動記録など、とても詳しく記入していて、お家の方にも伝えて」いた。一人ひとりの行動を「詳しく伝えることが、おうちの人への支援に」なると感じている。特に異食のことなど、詳しく伝えていたと語った。

(5) 子育て支援についての現在の自分の学びの課題

子育て支援は、保育全般と切り離して考えられるものではなく、「最初から最後まで」繋がっているのだと思うと述べた。

実習で幼稚園での子育て支援の場に立ち会ったが、「例えば『広場』では親同士話をするのが、子育て支援になっている。みんな形が違っている」と思うそうである。

今後は、特別研究でのインタビューなども経験しながら「この前は、率直に聞いたけれど、思い返せばちょっと遠回しというか、」それぞれの保護者の特徴に合わせた聞き方が必要なのかも感じるそうだ。さらに、保護者にとっても「マイナスにならない言い方」が出来たら良いと思って、考えている。

現場では、忙しい中で「子どもや親のことを、『困った人』と考えてしまうこともあると思うが、その原因が（現場の中に）きっとあるのではないかと語った。

④ こども保育コース2年生 学生D

学生Dは、1年生から「広場」に積極的に参加している。「広場」への参加や授業、実習を通し、2年生になって自身の保護者の見方、関わり方に変化があると感じていた。

保育者となってから保護者との関わりが増えることに対し、意欲や期待を持っていることにも言及した。

インタビュー担当者	第1筆者
インタビューを行った時期・場所	2018年8月 保育時実習指導室（本学）
インタビュー総時間	15分
インタビューの主な内容	(1) 保護者に対する自己の変化と気づき (2) 子育て支援についての自分の現在の捉え方 (3) 保育者を目指す者としての子育て支援への思い

(1) 保護者に対する自己の変化と気づき

「広場」への参加に関しては、「1年生の時って、子どもしか見ていなかったですね。子どもがどう遊んでいるか、子どもの近くで見るとしても、ああ、こういう風に遊ぶんだ、次にこの遊びに行くんだっていうのが、2年生になるにつれて、保護者の方も見られるように、意識するようにはなった」と自身の変化を感じている。

1年生の時は、「普段子どもと関わらない時間が多いので、まず今の子どもはどうしているんだろうという所からスタート。それだけで時間はすぐ終わっちゃう」、「どうしていいかわからない時に、保護者が学生のことを分かっているから、『お姉さんと遊んできなよ』っていう声かけをしてくれて、少しずつ溶け込んでいける」と振り返っていた。

2年生になってからは、子どもだけでなく保護者の存在も意識するようになり、「雰囲気でちょこっとずつ（自分と相手の心の）距離をつめたり」、「あそこから（子どもを）見ているんだとか、そういうのは見るようになった」と話していた。これらの変化の要因として、「広場」への参加や授業、実習での学びを挙げている。

「数回しか来ていない人（保護者）だと、他の子に迷惑をかけちゃいけないとか、そういうのがあるのに、それを我慢して子どもにやりたいことをさせる、一歩引く…。そういうのがあるのかなってたまに感じます」と、子どもへの接し方、見守り方への保護者自身の成長への気づきも述べていた。

(2) 子育て支援についての自分の現在の捉え方

子育て支援について常に意識していることは無いそうである。ただ、1年生の時には考えることが無かったそうだが、学生が子どもと遊んでいる間に、保護者同士がテーブルを囲み会話を楽しむ姿や、子どもから離れて遊ぶ様子を見守る姿を目にし、広場に参加している時間は、子どもとのみ過ごす時間から解放され、リラックス出来ているのではないかと、気分転換になっているのではないかと思うそうで、「広場」に参加することの保護者のメリットについて話した。

さらに、学生が「広場」に参加する保護者の意図として、「普段あまり関わらない新しい人と関わることで、子どもがどういう風にするのかなっていうのを、保護者は新しい世界ではないけど、体験させたいみたいな感じを思っていて、学生と関わることで子どもを客観的に見られるようになるのではないかと感じ取っていた。

(3) 保育者を目指す者としての子育て支援への思い

間もなく保育者となる者として、保護者を支えられる保育者になりたいという思いにも言及した。「何も言えないことばかり出てくるんだろうけど、（保護者の）実際の声を聞いてみたい」、「こういう風に思っているんだとか、それに対して、こうだったら（支援）できるかなとか、そういうのをやってみたいですね。アドバイス出来るものはまだ持っていないですけど、役に立てるものを見つけない」と、子育ての現状を把握したい、自分なりに支援したいという意欲を語っている。

学生が参加可能である「広場」が身近にあることについては、「子どもと関わる時間自体、『広場』が無いと無いし、実習前に入っておいて、子どもに慣らしておくっていうのもあるし、(1年生の時は)保護者のイメージが結構怖かったりっていうのもあって、不安がある中でも、『広場』に来ている保護者はやっぱり学生のことを考えて来ているので、すごく理解がある優しい人たちで、色々言ってくれる人もいるから、そういう親もいるんだっていう…」と、実習外で気軽に親子に触れ合える場があるメリットや、参加することで変化した保護者へのイメージについても語った。

2. 保護者へのインタビューから

① 保護者 E

保護者 E は、こども保育コースの卒業生である。保育所に勤務していた経験があり、育児に専念するため一時退職したが、インタビューをした時点では保育職に復帰していた。

女兒一人(インタビュー時点で3歳)の子どもを育て、幼稚園入園前は平日、入園後は土曜日の「広場」に参加している。

「広場」に参加する学生の姿から、保育者を目指していた学生時代を思い出すこともあるそうだ。「広場」では、保護者 E が緊張した面持ちで参加する学生に話しかけたり、自身の学生時代について話したりする様子も見受けられる。

インタビュー担当者	第1筆者
インタビューを行った時期・場所	2018年6月 保育室(本学)
インタビュー総時間	10分
インタビューの主な内容	(1) 「広場」における学生への意識 (2) 同じく保育者を目指していた者としての思い

(1) 「広場」における学生への意識

「広場」に学生が参加することをどう感じているのかについて、「(学生が参加していることを)意識しています。学生がいるからということが、『広場』に参加している理由の全てではありませんが、参加する動機の一部です」と話した。

また、以前仕事を退職し、育児に専念していた頃を振り返りながら、「今は仕事をしていて、子どもも幼稚園に通うようになったので常に一緒にいる生活ではないけれど、以前は子どもと24時間ずっと一緒だったため、学生が見てくれるのは、目を離せるし、その間リラックス出来るという点でいい。学生が子どもと遊んでくれている間、先生と、それから保護者同士で話したりすることも出来るし…。30分だけでもそういったことをすることで、一旦気持ちをリセット出来て、また子育てを頑張ろうという気持ちになれます。」と、学生が子どもと関わることへの、保護者のメリットを挙げた。

(2) 同じく保育者を目指していた者としての思い

「自分が学生だった頃は、『広場』は無かったけれど、実習の他に子どもと関わる機会がありました。その経験からも、学生のうちに子どもと沢山関わることの大切さは分かりますね」と、かつては学生と同じく保育者を目指し、本学卒業後に保育職に就いている立場だからこその話もあった。

② 保護者 F

保護者 F は、男児一人（インタビュー時点で 5 歳）、女児一人（インタビュー時点で 2 歳）を育てている。男児が幼稚園入園前から「広場」に参加し、幼稚園入園後は、平日は女児と、土曜日は二人の子どもと「広場」に参加している。

こども保育コースではないが本学の卒業生であり、「広場」の中で本学卒業生の他の保護者や高校の同級生と、子育てに関する情報交換をするなど会話を楽しむ姿が見られる。

インタビュー担当者	第 1 筆者
インタビューを行った時期・場所	2018年 6 月 保育室（本学）
インタビュー総時間	10分
インタビューの主な内容	(1) 「広場」における学生への意識 (2) 学生への思い

(1) 広場における学生への意識

「家だとずっと自分が子どもの相手をしなくてはならないので、お姉さん(学生)がいることは非常に助かります。(子どもと) 離れられるとはいえ、遠くにいる訳ではなく、同じ部屋など自分から見える場所に子どもがいるので、安心感もあり、その距離感がいい」と、学生が参加することで得られる、子どもとの距離感について語った。

さらに、「子ども（女児）が、お姉さんに最近慣れてきたと思う。いつも同じお姉さんという訳ではないけれど、人が変わっても平気で楽しそうに遊ぶ姿が増えてきた。そこに子どもの成長を感じる」と、子どもから一歩距離を置き学生との関わりを見ることから感じる成長についても言及している。

(2) 学生への思い

「保育者を目指しているというのを知っているので、お姉さんを応援したいという気持ちもある。自分と子どもが参加することで、自分も助かるし、お姉さんの役にも立てているのがいい」と、「広場」への参加から、学生に対して応援の気持ちを持ち、同時に学生にとって役立っているという満足感も得ていると述べた。

IV. 学生の子育て支援力育成の過程を考える

学生や保護者へのインタビューの結果から、「広場」での保育実践を通し、学生の子育て支援力がどういった過程を経て育成されているのか、そして学生と保護者が関わることにどういう意義があるのかを考察する。

1. 2年間を通しての子育て支援の捉え、保護者との関わり方の変化

1年生である学生 A、B と、2年生である学生 C、D の子育て支援への捉え、保護者への関わり方を比較すると、違いが認められる。

表 1、2 は、1年生と 2年生のインタビュー結果について分析し、まとめたものである。1年生は、「①保護者・子どもにとっての『広場』の意義を捉える」、「②保護者に対する気付きを得る」、「③子育て支援に関する思いを獲得する」、「④目指す保育者像を獲得する」の 4つのカテゴリと 12のサブカテゴリ、2年生は、「①学生にとっての『広場』の意義を捉える」、「②実習での学びの再構築をする」、「③保護者に対するイメージ、関わり方の変化に気付く」、「④子育て支援に対するイメージ、思いの変化に気付く」、「⑤保育者となってからの課題、抱負が具体的に表出する」の 5つのカテゴリと 8つのサブカテゴリを抽出することが出来た。

表1 1年生のインタビュー結果

カテゴリー	サブカテゴリー
① 保護者・子どもにとっての「広場」の意義を捉える	(1) 保護者が、家庭では子どもにさせられないことが出来る。 (2) 子ども同士のトラブルがあっても、「お互い」様の雰囲気がある。 (3) 自由な雰囲気の中で遊べる
② 保護者に対する気付きを得る	(4) 色々なタイプの保護者がいて、子育ての仕方も様々である。 (5) 共感、惹かれる、または正しいかどうか迷うような子どもへの関わり方をする保護者がいる。 (6) 保護者と接することへの恐怖心が払拭される。 (7) 保護者の言葉から、役に立てていると感じる。
③ 子育て支援に関する思いを獲得する	(8) 保護者の背景などに踏み込む難しさを感じる。 (9) 現時点では知識、技術が未熟であり、頑張ろうと思う。 (10) 信頼関係を築くことの大切さを感じる。 (11) 未熟ではあるが、支援出来ることはしたいと感じる。
④ 目指す保育者像を獲得する	(12) 保護者の力となる、支えられる保育者になりたいと感じる。

表2 2年生のインタビュー結果

カテゴリー	サブカテゴリー
① 学生にとっての「広場」の意義を捉える	(1) 実習外で保護者、子どもと関わることの出来る実践的な場があることに意義を感じる。
② 実習での学びの再構築をする	(2) 実習で経験したことを基にして、子育て支援への新たな気付きを得る。 (3) 実習中に消化出来なかった学びを、「広場」への参加や、人に語ることで整理する。
③ 保護者に対するイメージ、関わり方の変化に気付く	(4) 1年生の頃の保護者の捉え方、関わり方が、2年生になってから変化したことに気付く。 (5) 自分だけでなく保護者自身も成長していることに気付く。
④ 子育て支援に対するイメージ、思いの変化に気付く	(6) 1年生では感じなかった、「広場」に参加することで、得られる保護者のメリット（子どもから解放される、リラックス出来るなど）に気付く。
⑤ 保育者となってからの課題、抱負が具体的に表出する	(7) 保護者の様々な声を聞くことに期待感を持つ。 (8) まだ自身が未熟であると感じながらも、保護者を支えたいと感じる。

これらを分析すると、1年生は、初めは緊張の中で保護者に対する恐怖心を抱きながら「広場」に参加し、参加する回数を重ね、保護者の姿を観察したり直接関わったりしながら関係が少しずつ構築されていくと、これまで感じなかった保護者に対する気付きを得る。

学生Aは、保護者によって性格や子どもへの関わり方が違うことに気付いたことについて、「一人ひとりの親にも子育ての『個性』がある」という言葉で表していた。

保護者に対する恐怖心を抱く学生にとって、積極的に保護者に声をかけるなど働きかけていくことは容易ではないが、「広場」では、学生のインタビューにもあるように、保護者から自然に声を掛ける場面も多い。学生がいることを承知しながら参加する、本学の「広場」の保護者だからこその姿とも言える。こういった環境が、「広場」の、学生が保護者との関係を築きやすい点に繋がっているのかも知れない。

また、支援の難しさも感じながらも、保育者を目指す者として出来る限り支えたいという気持ちも芽生えている。実際の子育て支援は、保護者へのアプローチの仕方、支援の形が様々であり、相手の性格や事情など、個々のケースに合わせて支援をすることとなる。しかし、学生Bが「子育て支援って聞くと、子育てをする保護者を助けることだと思うので、やっぱり私達が、保護者に対してアドバイスしてってということなのかな」と話すように、1年生は、子育て支援に関する理解が、「子育て支援＝子育てに関する知識や技術をアドバイスすること」に留まっている学生

も少なくないのかも知れない。「広場」での実体験を通し様々な保育の学びをする中で、子育て支援の意味、在り方を、理解する過程の途中であるとも言えよう。

2年生になると、実習外で保護者や子どもと触れ合える、実習前に子どもと接して慣れておきたいと、自分自身が「広場」に参加することで得られるメリットも意識していることが分かる。

1年生の頃は子どもと接することに必死で、落ち着いて全体を見る余裕がなかったものの、「2年生になるにつれて、保護者の方も見られるように、意識するようにはなった」（学生D）と、自身の成長の変化にも気付いていた。そして、保護者や子どもの成長も感じ取っている。

さらに、実習での経験を基に子育て支援について振り返り、「広場」を通して学び直しをしていることも分かった。学生Cの、「子育て支援は、保育全般と切り離して考えられるものではなく、『最初から最後まで』繋がっているのだと思う」という言葉は、実習や「広場」での実践の積み重ねから獲得した学びの深さをよく表している。2年生は、実習での経験ならびに「広場」での経験が、子育て支援へのさらなる理解に繋がり、「広場」における心の余裕をも、もたらしているのかも知れない。

保育者として子育て支援に携わることに対し、「何も言えないことばかり出てくるんだろうけど、（保護者の）実際の声を聞いてみたい」（学生D）、「子どもや親のことを、『困った人』と考えてしまうこともあると思うが、その原因が（現場の中に）きっとあるのではないか」（学生C）という語りからも、1年生の頃よりも成長したことで、期待感を持ち、冷静に保育現場の課題を捉えられる余裕が生まれていると考えられる。

2. 保護者と学生が関わる意義

学生のインタビューから、「広場」での学生の保護者の見方、関わり方に変化が出てくることが分かったが、保護者へのインタビューでは、保護者自身も学生との関わりにある意識を持ち、感謝や喜びをも感じていた。

保護者E、Fが、本学の「広場」に参加する動機の一部として学生の参加について挙げ、普段は自分と子どもだけの時間が長く大変であるが、「広場」では学生が子どもと遊ぶことで離れられ、リラックス出来るというのは、他の保護者からも度々聞かれる。

子育て支援広場、サークル、子育て中の保護者を対象としたプログラムなどにおいて、保護者のリラックス感を高めることを意識することはよくあり、保護者自身もそれを求めて参加するケースもある。

清水（2009）は、母親の育児幸福感を高める育児プログラムを開発し、参加者を対象とした調査を行ったが、心理的効果では、「不安感」、「緊張と興奮」は低下し、育児ストレスや育児幸福感への影響では、「子どもの発達に対する懸念」が低下して、「子どもからの感謝と癒し」が高まったとしている。さらに、「他の参加者と話し合えたこと」、「子どもと離れられたこと」が、プログラムに参加して良かった点として保護者から挙がり、参加後には、心のゆとりや優しさ、子どもへの愛着に関する変化がみられたという。

これは、参加したばかりの頃は緊張した面持ちで他の保護者や教員、学生と接し、自分がしっかり見ていなければと子どもから離れられない保護者が、回数を重ねるごとに、学生に子どもを預け、安心した気持ちで他の保護者と会話を楽しみ、一歩引いて子どもの姿を見られるようになったり、気分転換出来たことで改めて、「子育てを楽しもう、頑張ろう」という気持を持てたりする、本学の「広場」における保護者の姿に通じる。

さらに、学生Dのインタビューから分かるように、子育て支援を常に意識している訳ではないが、「広場」における学生の存在が、保護者の安心感や満足感に繋がっていること、そして「広場」が、保護者同士、子どもと学生同士、保護者と学生同士などと、参加者と他者を結び付ける役割を担い、保護者が一歩引いて客観的に子どもを見つめられる場となっていることを、学生自身が理解している。

保護者Fのように、学生と子どもとの関わりから子どもの成長を感じ、学生に対して感謝や応援の気持ちを持つ一

方で、学生は保護者から感謝の言葉をかけられ喜びや自己肯定感が高まり、保護者に対する見方、考え方が広がるのは、保護者と学生の間に、育ち合いが生まれているとも言える。

「広場」には、保護者Eのようにこども保育コースの卒業生である保護者、保育者経験のある保護者がおり、「広場」のような実践の場が、保育者を目指す学生にいかに重要なのかを認識していることも、学生が広場の保護者との関わりを通し、得るものが大きいと感じる理由だろう。

なお、学生の「広場」を通した子育て支援力育成の過程として、どういった内的、外的要因により、1年生から2年生にかけて保護者へのイメージや関わり方、子育て支援の捉えに変化が出てくるのか、インタビューから得た幾つかの要因をあげ、図1に示した。

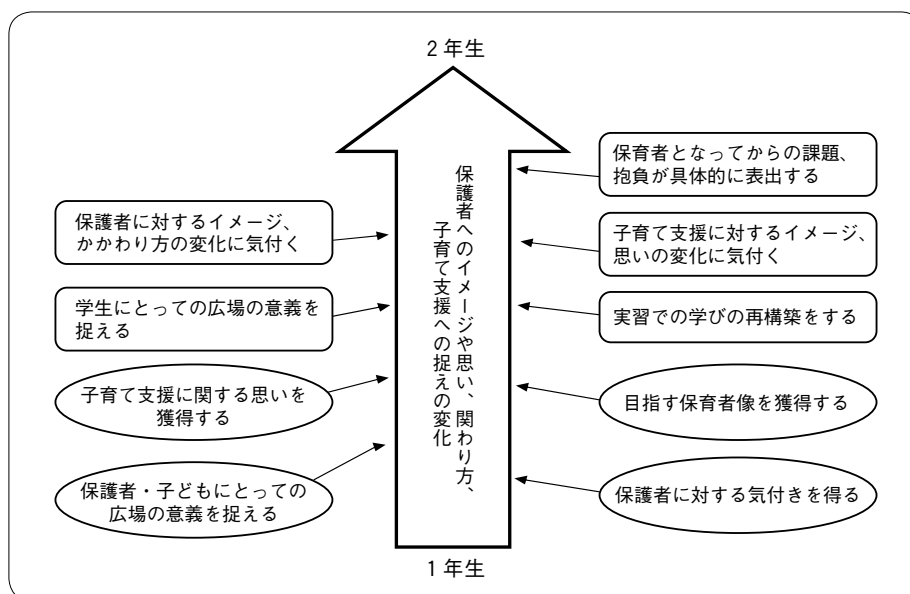


図1 広場を通した学生の子育て支援力育成の過程

※ ○ は、1年生のインタビューから得た学びのカテゴリー、
 □ は、2年生のインタビューから得た学びのカテゴリーである。

V. 子育て支援力育成のための課題とは

新カリキュラムを見据え、さらに子育て支援力育成への学びを充実させていくためにどうすれば良いのか、今後の課題について示したい。

矢萩（2018）は、4年生大学の保育者養成校における授業「子育て支援実習」の中で、学生が外部施設での実習⁴を通し、保育者の専門性がどのように養成されたのかを考察している。その実習日誌の記録から、「観察力の発揮」、「保護者のさまざまな気持ちに思いを巡らす『感受性』」、「母親たちからさり気なく投げかけられる『質問に応じる力』」の3点に育ちがみられた。

まず、「観察力の発揮」は、保護者や子どもの様子をしっかりと見ながら、どう接していけばいいのかを考え、実践することであり、「必修の実習では、何かにつけ、『積極性』が求められる彼らが、慎重に聴き、じっくりと観て考え、そうすることで、その支援の場を利用する保護者の一人一人異なるニーズに気付いたり、同じ月齢の乳児でも、その発達の個人差を目の当たりに出来たりしている」⁵としている。「保護者のさまざまな気持ちに思いを巡らす『感受性』」は、支援員や保護者、祖父母、子どものきょうだいなど様々な関係性と共存しながら、それぞれの保護者の置かれている環境、背景に思いを巡らしているということ、「母親たちからさり気なく投げかけられる『質問に応じる力』」は、保護者とやり取りをする中で、自分で答えられる範囲で対応しており、子育ての知識や経験の重要性を実感している

としている。

本学の「広場」においても学生のこのような姿は見られる。本稿のインタビューの結果も踏まえると、学生が「広場」という実践の場で保護者と関わり、様々な内的、外的要因によって、保護者へのイメージや関わり方、子育て支援への捉えに変化もあり、幼稚園教諭免許や保育士資格取得のための実習の他に、保護者や子どもと接することの出来る実践の場があるということが、子育て支援力の向上に繋がっていると考えられる。

しかし、本学においては、「広場」という実践の場はあるものの、課題も出てきている。それは、子育て支援に関した学びを内容とする科目と「広場」の実践をどう繋げていくかということである。ここまでは、本学子育て支援広場を活用した、1年次前期から2年次前期までの学生による参加観察を通した子育て支援に関する学修の経過の一部を報告してきたが、今後は、2年次後期からは保育士養成課程（2019年度改訂新カリキュラム）により、「子ども家庭支援論」、「子育て支援」及び、本学独自科目として開講してきた「保育相談実践演習」において、表3に表わす科目が開始される。

Ⅳの表1の通り、1年生の「広場」参加観察による学びのカテゴリーとして、「①保護者・子どもにとっての「広場」の意義を捉える」、「②保護者に対する気付きを得る」、「③子育て支援に関する思いを獲得する」、「④目指す保育者像を獲得する」という4つが、挙げられた。一方、表2における2年生の学びのカテゴリーとして、「①学生にとっての広場の意義を捉える」、「②実習での学びの再構築をする」、「③保護者に対するイメージ、関わり方の変化に気付く」、「④子育て支援に対するイメージ、思いの変化に気付く」、「⑤保育者となってからの課題、抱負が具体的に表出する」の5つが挙げられた。

子育て支援の学修は、子ども理解と保育内容等の理解を基盤としながら、保護者理解、地域資源の活用に関する理解など、子育て支援の社会的な理解を含めた広範囲に及ぶ総合的な学修であると考えられる。

本稿において2年次前期までの学修経過を見ると、2年生の「保護者理解」や「子育て支援」に関するイメージの転換が明らかになった。この参加観察を経ての、学生の学びの経過は、指導教員が意図した学習成果というより、学生の自発的な気付きに負ったものが大きい。「広場」における親子との自由な関わりや交流の中での気付きを基にして、学生自身が目指す保育者像を描き、自らの「子育て支援観」を塗り替え続ける学びの過程を、保育者として活かすこ

表3 「子ども家庭支援論」、「子育て支援」、「保育相談実践演習」（2019年度改訂 新カリキュラム）

科目名	授業形態 /開講時期	担当教員	目 標
子ども家庭支援論	講義/2年後期	A (第1筆者)	1. 子育て家庭への支援の意義や目的について理解する。 2. 保育の専門性を活かした、子ども家庭支援の意義、基本について理解する。 3. 子育て家庭に対する支援体制について理解する。 4. 子育て家庭へのニーズに応じた多様な支援展開と、支援の現状や課題について理解する。
子育て支援	演習/2年後期	B	1. 保育士の行う保育の専門性を背景とした保護者に対する相談、助言、情報提供、行動見本の提示等の支援（保育相談支援）についてその特性と展開を具体的に理解する。 2. 保育士の行う子育て支援について、様々な場や対象に即した支援の内容と方法及び技術を、実践事例等を通して具体的に理解する。
保育相談実践演習	演習/2年後期	C (第2筆者)	1. 地域子育て支援の実際について事例を通して学び、理解する。 2. 保護者の心理を理解し、保育の中で行う子育て支援を行うためのかかわり方や考え方について学ぶ。 3. 保育現場での子育て支援、保護者支援の現状と課題について、理解する。

とが可能となる授業デザインと科目間連携が今後の課題であると考えます。

今後も、課題を検討しながら、学生の子育て支援力育成のための研究を続けたい。

注

- 1) 2018年度は、学内行事やこども保育コースの実習期間などを除き、「親と子の広場」を火曜日と金曜日、「さくらっこ広場」を土曜日に開催している。
- 2) 狩野奈緒子・長谷川美香・市川優 (2017) 子育て支援広場における学生の「子育て支援力」育成の試み——『親子クッキング』を活用したアクティブラーニング, 桜の聖母短期大学紀要第41号, p 37-65
- 3) 狩野奈緒子・石井美和・淋光江・長谷川茂 (2016) p 111
- 4) 事前・事後指導授業を含む通年集中で、資格・免許が必要な全ての実習を終えた4年次の8、9月の5日間(40時間以上)に行う。原則は協定先自治体にある地域子育て支援センターで実習をするが、協議の上、学生の希望も考慮する。
- 5) 矢萩恭子 (2018) p 191

文 献

- 1) 入江礼子・小原敏郎・白川佳子編著 (2017) 子ども・保護者・学生がともに育つ 保育・子育て支援演習, 萌文書林
- 2) 狩野奈緒子・石井美和・淋光江・長谷川茂 (2016) 桜の聖母短期大学「親と子の広場」における親子関係支援 第4報——発達の課題に向き合う保護者を地域で支えるために——, 桜の聖母短期大学紀要第40号, p 91-118
- 3) 狩野奈緒子・長谷川美香・市川優 (2017) 子育て支援広場における学生の「子育て支援力」育成の試み——「親子クッキング」を活用したアクティブラーニング, 桜の聖母短期大学紀要第41号, p 37-65
- 4) 厚生労働省子ども家庭局長通知 (2018) 「指定保育士養成施設の指定および運営の基準について」の一部改正について
- 5) 清水嘉子・関水しのぶ・遠藤俊子・廣瀬昭夫・宮澤美知留・赤羽洋子・松原美和 (2009) 母親の育児幸福感を高めるプログラムの実施と評価, 日本看護科学会誌第29巻1号, p 41-50
- 6) 矢萩恭子 (2018) 「子育て支援実習」において養成される保育者の専門性——実習日誌の分析を通じて——, 田園調布学園大学紀要第12号, p 169-193